

分娩時硬膜外麻酔について

1. 硬膜外麻酔とは

痛みを脳に伝える神経は、背骨の中にある脊髄という神経の束に集まってから、脳に向かいます。

この脊髄は、脊髄液に浸り、さらに硬膜という膜に包まれています。そのさらに外側を背骨が囲んでいます。

硬膜より外で背骨に囲まれた空間を硬膜外腔といいます。ここに麻酔薬を注入すると、脊髄に向かって集まってきた多くの神経を効率よく麻痺させ、痛みを感じなくすることができます。

この麻酔法を硬膜外麻酔といいます。

2. 適応

分娩中の血圧が高い方、分娩の痛みによって不穏となる方、心臓に病気がある方、骨盤位分娩の方、その他

3. 方法

背骨はいくつかの骨が並ぶことによって形成されています。この骨と骨の間に注射針を刺していきます。

注射針先が硬膜外腔に入ったら、注射針の中に細いチューブを通していきます。すると、細いチューブの先は硬膜外腔に入っていきます。その後で注射針は抜き、チューブだけを残します。このチューブを通して局所麻酔を注入すると、脊髄に向かう痛みの神経が麻痺します。この麻酔を腰の背骨の場所で行うと陣痛（子宮収縮）の痛みや産道の痛みが軽減します。※開始時期は、陣痛が始まり分娩進行を認めた時点ですが、個人差がかなりあります。そのため、原則、医師の判断により、使用開始時期は決定します。

4. 処置に伴うメリットとデメリット

・メリット

陣痛や産道の痛みが軽減し、分娩中の血圧の上昇や心臓の負担が和らぎます。精神的に余裕ができて、落ち着いて分娩を進めることができます。産道の緊張が弱まるので、児がスムーズに通過することができます。

・デメリット

血圧の低下、頭痛、神経のしびれや運動麻痺のような後遺症、硬膜外腔の血腫、麻酔薬に対するアレルギーが生じてしまうことがまれにあります。また、硬膜の中まで針やチューブが入った場合、脊椎麻酔となってしまうことがあります。陣痛が弱まったり、児の回旋がうまくいかなくなったり、いきみのタイミングが判らなくなったりして分娩が長引いてしまう事があります。このような場合、陣痛促進剤や吸引分娩の併用が必要となることがあります。膀胱の充満感が判らなくなるので、無意識のうちに膀胱に尿がたまりすぎることがあり、導尿が必要になることもあります。

5. 効果について

陣痛を軽減することができますが、完全になくなるわけではありません。また、効き目には個人差もあります。

途中で陣痛軽減の効果が切れてきても分娩進行状況によっては麻酔薬を追加しない場合があります。